
あの、そこ私の席なのですが

枯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの、そこ私の席なのですが

【Nコード】

N9779Y

【作者名】

枯葉

【あらすじ】

偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽目に。 無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です

あの、そこ私の席なのですが

「……」

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、目の前の光景にそのままの姿勢で固まった。

三時間目と四時間目の間の休み時間。次は移動教室の為、人はほとんど残っていなかった。加奈も途中でノートを間違えた事に気づき、あわてて引き返してきたのだ。

教室の中に残っていたのは二人の男子生徒。

「あっちゃー……」

此方を見て、気まずげに顔を引きつらせるクラスメイトの松本君と、……気のせいではなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

窓際の後ろから二番目、そこは間違いなく加奈の席だ。

此方に後頭部を向けている人物の頭は、上下に激しく揺れている。頬を机にスリスリと擦りつけて……擦り、付け……。

「荒川、荒川」

立ち尽くす加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君……
……って荒川君!?

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず、不機嫌そうに答える荒川君らしき人……というか邪魔ってなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから」

「だから邪魔す、……なに？」

のっそりと松本君を見上げた荒川君の視線が、扉の前で立ち尽くす加奈の方へと向き、止まった。

切れ長の一重の目を見開き、微動だにしない荒川君らしき人、……いや荒川君だね、うん。何してるのさ、荒川君。人の席で。その両手は未だに加奈の机をしかと握りしめたままだ。

「「「……」」」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、どしたの？」

「……それはこっちの台詞なんだけど」

「……だよねーあは、は、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君は此方をじっと見つめたままで動かない。

その視線の激しさに、加奈の方はとても荒川君を見返せない。

「あーやばいよー次始まっちゃうよー」

白々しさも全開の口調で松本君は言い、荒川君の腕を掴むと、ぐいぐい引きずるように加奈の横を通り過ぎ

「桑原さんも急いで急いで、遅れるよー」

そのままズルズルと荒川君を連れ、出て行ってしまった。その間も荒川君の熱視線は外れないままで。

「……………なんだったの」

どっと疲れを感じながらも、ノートを取り出すために机に向かう。……一応、我が机に何かされてないかをチェックするためにも。

意味が分からない

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だってほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねえ。

すみませんと頭を下げた時も、とある方向から重い視線を感じるような……気のせいだね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから二番目の席へと腰を下ろす。

「えーそれでは、教科書23ページの……」

教師の言うままにページを開くも、内容なんてちつとも頭に入っていない。

思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。……結局あの二人、というか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えたけど……いやいや、そんな馬鹿な。

あの二人、タイプは違うものの、二人揃って超モテ男だし。

華やか美形の松本啓介君。ふわふわの茶色い癖っ毛に、甘い垂れ目の整った顔立ち。巧みな話術で距離を縮め、常に数人の女の子と付き合っているという噂。

……さっきみたいにぎこちない松本君なんて初めて見た気がする。常にある余裕オーラもなんか消えかけてた感じだし……んー？

そして問題のもう一人、冷徹美形の荒川祐也君。常に無表情なそ

の顔は凄まじく整っていて、一切の隙がない。癖のない黒髪に切長の瞳。三秒目が合ったら、どんな女でも惚れさせるといふ逸話さえある。

最も、告白してきた女の子は全て一刀両断してるらしいんだけど……
……っってイタイイタイイタイ。何だか痛い気がする。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに

私、窓際後ろから二番目。

荒川君、廊下側の一番後ろ。

おまけで松本君、私と同じ窓際の一の前。

まさかと思いつつ、チラリンと右斜め後ろを向く……ええええつ！

め、目、目が合った……！！

一番奥の人と（荒川君なんだけど）合っちゃったよ！！

「……」

確認。

……ええええつ。私、何かしましたでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779y/>

あの、そこ私の席なのですが

2011年11月29日21時49分発行